

余部鉄橋の保存と再出発に向けた提言

～鉄橋からはじまる多彩な交流と余部の元気あふれる地域づくりに向けて～

平成 19 年 3 月 13 日

余部鉄橋利活用検討会

兵庫県知事 井戸敏三様

余部鉄橋利活用検討会

川崎雅史

余部鉄橋の保存と再出発に向けた提言
～鉄橋からはじまる多彩な交流と余部の元気あふれる地域づくりに向けて～

余部鉄橋利活用検討会は、平成 18 年 3 月からの 1 年間、余部鉄橋が長い歴史の中で地域の人々の生活に与えてきた地域資産としてのアイデンティティがどこにあるのかを見極めるために、近代土木遺産としての価値、地域振興の観点から景観資源・観光資源としての価値を検証し、望ましい現橋の残し方や利活用方策について検討を行った。

余部鉄橋は、明治 45(1912)年に当時の橋梁技術を結集し建設されて以来、約 100 年の間、山陰本線の運行を支えてきた。まもなく、余部橋梁の架替事業が始まる。但馬地域の悲願であった山陰本線の安全性と定時性の確保を実現するため、新橋梁への架け替えが進められ、現橋梁は鉄道橋としての役割を終えようとしている。

訪れた人の誰もが圧倒される規模と特徴的な鋼トレスル式の大橋脚、山陰海岸の豊かな自然と但馬地域の原風景が残る余部の集落とが重ね合わさったダイナミックな景観は、住民から愛され、そして但馬地域の貴重な観光資源として訪れる多くの人に親しまれてきた。地域資産たる大きな所以である。

一方で、余部鉄橋の周辺住民は、これまで鉄橋からの落下物に苦しめられてきた。本検討会の中でも、地域の人々は、余部鉄橋の近代土木遺産や観光資源としての価値を認め、鉄橋への愛着・思いがあるとしながらも、「安全安心の確保ができないのであれば、全面撤去もやむを得ない」とのつらく苦しい思いを繰り返し述べられた。構造的な側面からも、現鉄橋の腐食が進行していることに加え、冬期に強い季節風が吹き荒れる立地条件の中で、新橋梁が現橋梁に並行して建設されることから、現橋梁をそのまま存置した場合には、並列橋条件による風荷重の増加と振動の発生による現鉄橋の耐久性の低下が懸念される。また、これらの安全対策と維持に対する技術と莫大な費用についても大きな障壁となる。

以上の前提を認識した上で、検討会の議論を踏まえ、余部鉄橋の保存と再出発に向けた基本理念「鉄橋からはじまる多彩な交流と余部の元気あふれる地域づくりに向けて」と基本方針を取りまとめた。

兵庫県をはじめとする関係者におかれては、余部鉄橋利活用方策の実現にあたり、この提言書に盛り込まれた考え方を広く反映されることを期待する。

《利活用の基本理念》

『鉄橋からはじまる多彩な交流と余部の元気あふれる地域づくりに向けて』

1 . 「風景のイメージーションと地域づくりの核」

余部鉄橋は、その姿とそれを取り巻く人々の営みの中に、多くの教訓を見出すことができ、それらを後世へのメッセージとして残すことが重要である。歴史的遺産としての価値を記録保存するだけでは、余部鉄橋が近代文明の象徴から地域文化の象徴へと変遷する中で、その最も大きなアイデンティティを形成した余部の風景の核が喪失される。安全・安心を確保した上で、鉄橋の姿を一部でも現地に保存し、そのスケールや存在感の現実性を伝えること、すなわち風景のイメージーション機能を与えることによって、新たな地域と風景づくりの核とする。

2 . 「多彩な交流活動と地域づくりへの視座」 - 新たな風景『空の駅』の創出 -

鉄橋の一部は、展望施設など新たな役割を与え、駅から橋、橋からまちへとつながる一体的な地域整備を試みることによって、新たな地域の魅力と人々の多彩な交流活動を誘発する。地域住民が主体となった「地域づくり」を展開することにより、近代土木遺産の保存の意義が将来にわたり広く世界に発信され、余部鉄橋を中心とした多彩な交流と元気あふれる地域の創造につながることを切望する。

《利活用の基本方針》

1 . 将来にわたる安全・安心の確保

余部鉄橋の現地保存にあたっては、これまで冰雪等の落下物の不安に脅かされてきた地域住民の意向を第一に「安全・安心の確保」を図ることが不可欠である。

2 . 余部鉄橋への新たな使命の付与と記録保存・情報発信・交流拠点の整備

安全・安心の確保が可能な範囲で、余部鉄橋はその一部を現位置に残すこととし、「後世への継承」「地域の活性化」「人や情報の交流拠点」としての利活用を一体的に進めるべきである。具体的には、保存した余部鉄橋に展望施設等としての新たな使命を与えるとともに、余部鉄橋の歴史や教訓を伝えるための「記念館」的な施設や情報発信と交流拠点としての「道の駅」のような施設を中心に、駅からまちへとつながる地域整備が望まれる。

3 . 住民が主体となった地域づくりへの展開

余部鉄橋の利活用方策を「点」としての取り組みと捉えるのではなく、「面的」な地域づくりとして広く展開されることが重要である。その地域づくりとしての利活用方策が、効果的かつ継続的に進められるためには、地域住民の熱意と工夫、そして住民自らの積極的な取り組みが不可欠である。

4 . 近代土木遺産の保存・活用に関する議論の活性化を期待

今回の現橋梁の残し方が、今後の近代土木遺産の保存・利活用に関する議論に一石を投じることを期待する。併せて、近代土木遺産としての価値を広く国民と共有し続けるため、「登録有形文化財」としての登録に向けた取り組みを進めることが望ましい。

5 . 多様な主体が支える長期的な取り組みが必要

この取り組みは、後世への継承を目的とした長期的なものとなるため、地域住民を中心としながらも、行政機関や企業、市民団体等の多様な主体が、各々の特質を活かした分野で役割を創出し、継続的に支えていくことが望まれる。

余部鉄橋の保存と再出発に向けた提言

～鉄橋からはじまる多彩な交流と余部の元気あふれる地域づくりに向けて～

目 次

利活用の基本理念と検討の流れ

- 1 利活用の基本理念 1
- 2 検討の流れ～検討の出発点「後世に余部鉄橋の何を伝えるか？」 2

利活用の前提条件～安全・安心の確保（地元の想い）

- 1 諸条件から最大残せる範囲を設定～利活用に係る構造的要件 3
- 2 安全・安心の確保、将来にわたる責任の所在の明確化～地元の想い 3

利活用方策の基本方針

- 1 利活用の中心となる余部鉄橋及び新橋梁～存在感の継承と新たなシンボル 5
- 2 利活用の3本柱～余部鉄橋の継承/余部地域の活性化/人や情報の交流拠点 5
- 3 一体的な利活用による相乗効果 7
- 4 議論の継続～時間をかけて再出発した余部鉄橋の価値をつくりあげる 7

利活用方策の進め方

- 1 長期的な取り組み～将来の運用の限界を見据えた判断の仕組みづくり 8
- 2 各主体の役割～直接的な関わりと間接的な関わりで利活用を積極的に支える.. 8

【参考1】余部鉄橋の概要と本検討会設置の背景 9

【参考2】余部鉄橋の利活用方策の基本方針（素案） 10

【参考3】余部鉄橋利活用検討会の検討経緯と構成員 11

【参考4】用語解説 12

- 1 利活用の基本理念

『鉄橋からはじまる多彩な交流と余部の元気あふれる地域づくりに向けて』

(1) 「風景のイメージーションと地域づくりの核」

余部鉄橋は、その姿とそれを取り巻く人々の営みの中に、多くの教訓を見出すことができ、それらを後世へのメッセージとして残すことが重要である。歴史的遺産としての価値を記録保存するだけでは、余部鉄橋が近代文明の象徴から地域文化の象徴へと変遷する中で、その最も大きなアイデンティティを形成した余部の風景の核が喪失される。

安全・安心を確保した上で、鉄橋の姿を一部でも現地に保存し、そのスケールや存在感の現実性を伝えること、すなわち風景のイメージーション機能を与えることによって、新たな地域と風景づくりの核とする。

(2) 「多彩な交流活動と地域づくりへの視座」 新たな風景『空の駅』の創出

鉄橋の一部は、展望施設など新たな役割を与え、駅から橋、橋からまちへとつながる一体的な地域整備を試みることによって、新たな地域の魅力と人々の多彩な交流活動を誘発する。

地域住民が主体となった「地域づくり」を展開することにより、近代土木遺産の保存の意義が将来にわたり広く世界に発信され、余部鉄橋を中心とした多彩な交流と元気あふれる地域の創造につなげる。



(写真提供：服部 敏明)

- 2 検討の流れ～検討の出発点「後世に余部鉄橋の何を伝えるか？」

(近代土木遺産・観光資源としての価値を検証)

余部鉄橋利活用検討会は、平成 18 年 3 月からの 1 年間、余部鉄橋の近代土木遺産としての価値や地域振興の観点から観光資源としての価値等を検証し、望ましい現橋の残し方や利活用方策について検討を行った。



余部鉄橋と特急「はまかぜ」

(地域住民の生活との調和や継続的な維持管理性等を議論)

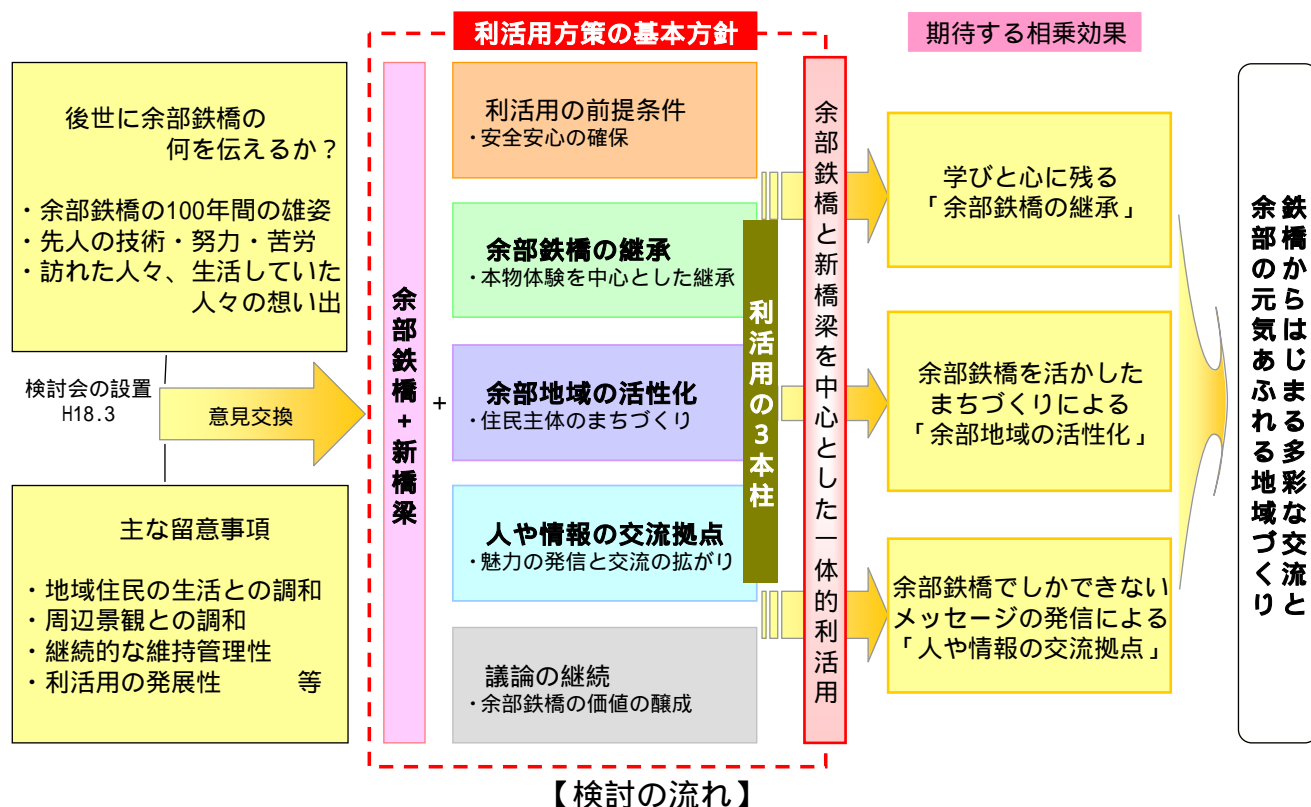
検討に際しては、「後世に余部鉄橋の何を伝えるか？」を出発点とし、地域住民の生活や周辺景観との調和、継続的な維持管理性、利活用の発展性等について意見交換を重ねた。

(利活用の3本柱に加えて議論の継続を)

その結果、安全・安心の確保を「利活用の前提条件」とした上で、余部鉄橋と新橋梁を中心とする3つの取り組み方向「利活用の3本柱」と、再出発した余部鉄橋の価値の醸成を期待する「議論の継続」からなる『利活用方策の基本方針』を導いた。

(地域づくりへの展開と元気あふれる地域の創造)

今後、この基本方針が一体的に進められ、地域住民が主体となった「地域づくり」へと展開されることにより、後世へのメッセージ性の向上や個性的な情報の発信、そして多彩な交流が促進され、余部鉄橋を中心とした元気あふれる地域の創造をめざす。



利活用の前提条件～安全・安心の確保（地元の想い）

- 1 諸条件から最大残せる範囲を設定～利活用に係る構造的要件

(1) 老朽化と高額な維持管理費

- ・ 主柱は著しい腐食（断面欠損率 15%以上）。
- ・ 高額な維持修繕費（2,300 万円 / 年；部材交換、ペイント塗装等）。

(2) 完全な現位置保存は困難

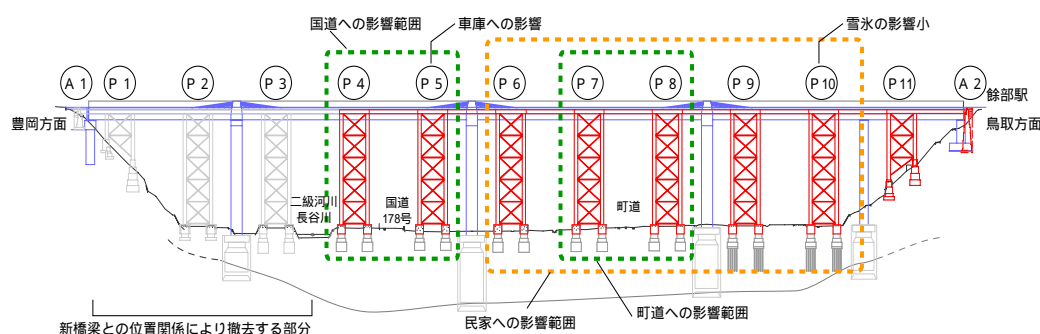
- ・ 近代土木遺産としての高い評価（日本の近代土木遺産 A ランク（土木学会））。
- ・ 新橋梁の施工に伴い、東側の 3 橋脚は撤去。
- ・ 現位置での完全な形で保存できないため、文化財指定は困難（登録は可能）。

(3) 風対策が必要

- ・ 風速 20m 以上で列車の運行を抑止（年 100 回以上）。架け替えで 9 割低減。
- ・ 新橋梁との並列橋となる場合について、風洞実験による検証必要。

(4) 落下物や橋梁自体の安全対策が必要

- ・ 人家や公道における落下物に対する住民の不安の払拭が必要。
- ・ 残し方に対する構造計算（安定計算等）必要。



- 2 安全・安心の確保、将来にわたる責任の所在の明確化～地元の想い

(1) 安全・安心確保のための全面撤去と観光資源としての一部保存で揺れる～当初の意向

- ・ 安全・安心の確保と今後の維持管理の保証ができなければ全面撤去するのが基本。
- ・ 一部を残して余部鉄橋の観光資源としての価値を継承したい。
- ・ ようやく議論が始まったところ。もう少し議論を重ねたい。
- ・ 鉄橋の記念館を現地につくってほしい

(2) 責任の所在を明確にした上で現橋の一部を残し後世へ継承～議論を重ねた上での意向

- ・ 鉄橋の記録と記憶を後世に伝えるものとしては、現物以上のものはない。
- ・ 現物があれば、今後も地域振興に活かせる可能性が高い。
- ・ 近代土木遺産の取り扱い事例としての情報発信をしていくべき。
- ・ 兵庫県が維持管理してくれるのであれば、不安が取り除ける。また、余部の将来のことも考えた中で、駅側 3 本を残してもらいたい。
- ・ 安全・安心の問題解決と将来にわたる維持管理の保証が最も重要。

“望ましい残し方”をシミュレーション～4つの視点で検討～

本検討会では、現橋梁の残し方について4つの視点から検討を行った。

検討結果としては、現時点では、以下の4案を薦める意見が多かった。但し、その他の残し方の可能性を否定するものではない。

今後、具体的な利活用方策の検討が進む中で、様々な課題の解決と風景の核の保全、余部地域のまちづくり等が調和した残し方に収束することを期待する。

本検討会では、現時点で地域住民の生活への影響が最も少ないと考えられる、鉄橋からの落下物に最大限配慮した余部駅側の3橋脚を残すことを想定し、利活用方策を検討することとした。

(なお、残した鉄橋は、兵庫県の財産として維持管理し、日常の軽微な管理は香美町等で行うことで調整が進められている。)

視点1：地域景観との調和～現橋のもつリズム感の継承と地域景観への影響を考慮

- ・現橋の連続性が作り出すリズム感の継承や橋脚の配置バランスの良いものが優位。
- ・地域の生活空間に対する影響と、近接迫力との兼ね合いに配慮。
- ・特に、新橋梁との重なりについては、景観的に大きな問題がないことを確認した。

視点2：安全・安心の確保～人家や公道に対する落下物等の不安を排除する

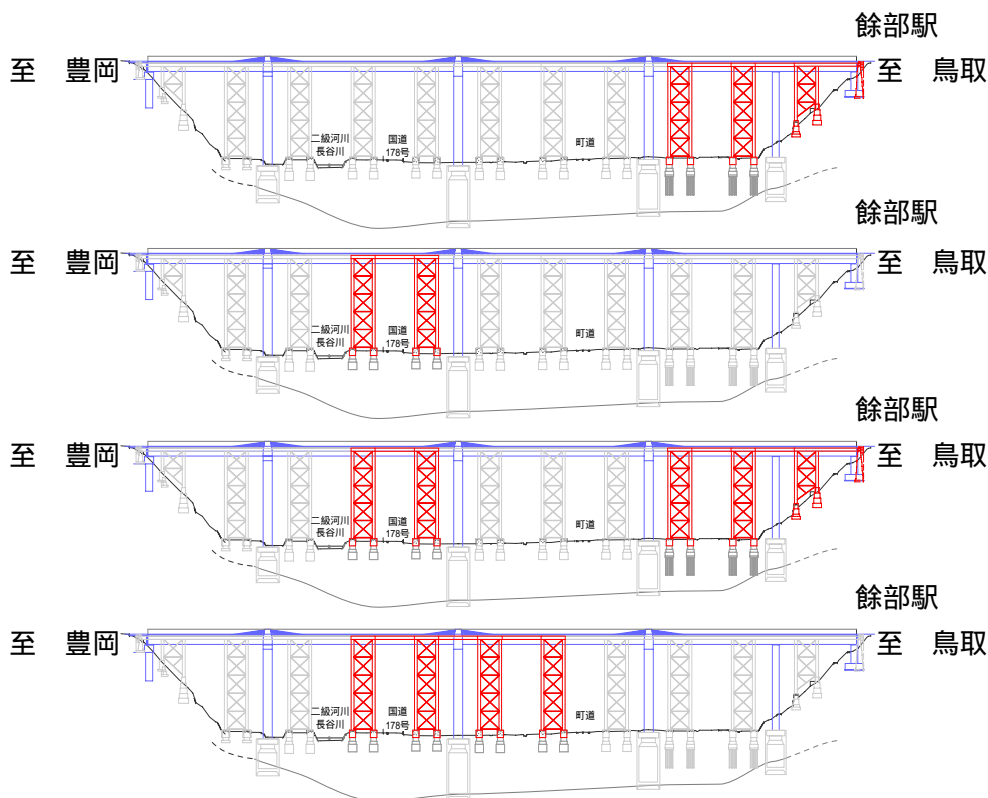
- ・橋上からの落下物の有無、橋上利用時の安全対策の必要性に配慮。
- ・地元委員を中心に最重要視すべき視点として挙げられた。

視点3：後世への継承～後世へのメッセージ性や周辺との一体的利活用を考慮

- ・全体イメージの再現性やアピール性により、メッセージ性のあるものが優位。
- ・周辺との一体的利活用が可能な残し方について検討。

視点4：維持管理～将来にわたる維持管理の確保

- ・維持管理の難易度が低いもの、10年間の維持管理費が低いものが優位。



【検討会において、現時点で適当であるとの意見が多かった残し方(4案)】

利活用方策の基本方針

- 1 利活用の中心となる余部鉄橋及び新橋梁～存在感の継承と新たなシンボル

(1) 現在位置に残すことの意義

～本物だけが持つ存在感と第二の人生の付与

- ・本物(Reality)だけが持つ存在感の継承
- ・全体像を思い起こさせる片鱗の役目
- ・事故の記憶の風化の防止
- ・記録と記憶(Story)の継承
- ・用途転換による第二の人生の創出(展望施設等)
- ・地域振興への貢献 等



(2) 新橋梁の存在意義～地域の生活環境の向上と新たなシンボル

- ・地域の生活環境の向上(安全性・定時性の確保)
- ・地域の新たなシンボルとしての存在
- ・列車からの眺望の継承
- ・山陰海岸の地形的特質からの橋梁の必要性の伝承 等

- 2 利活用の3本柱～余部鉄橋の継承/余部地域の活性化/人や情報の交流拠点

(1) 余部鉄橋の継承～現橋脚の保存による「本物体験」と鉄橋のある「風景の継承」

本物体験を中心とした継承

- ・100年間の記録と記憶を後世へ継承するとともに、新たな使命(付加価値)を付与する。
- ・具体的には、現橋橋脚を残し、これに近接した記録保存施設(記念館)の整備を行い、鉄橋に触れる本物体験を中心とした演出を行う。

親しみを増すための工夫が重要

- ・来てもらった人に伝えることを明確にする。
- ・より親しみを増すために、利用(見る・触れる、五感に訴える)しながら保存していく。
- ・「空の駅」等インパクトのあるキャッチフレーズで、PRし、余部駅と一体的に利活用していく。
- ・文化財への登録を進める等、近代土木遺産としての価値を広くPRしていく。
- ・本来この場所が持っているポテンシャル(場所の持つ可能性 ダイナミックな風景が見える視点場等)を低下させることなく、さらに魅力を磨き上げて継承していく。
- ・継承することを通じて、新旧の地域文化・風土との融和をはかり、まちづくり・地域づくりへと発展させていく。



(2) 余部地域の活性化～余部鉄橋を活用した地域住民主体による地域活性化

新たな風景の創出 『空の駅』

- ・ 風景の核を保全しながら、余部鉄橋と新橋梁を中心とした新たな風景を創出する。
- ・ 駅から橋、橋からまちへとつながる一体的な地域整備を試みる。
駅・橋・まちを近づける工夫。例えば、エレベータ等の新たな動線による一体化等。
- ・ 「空の駅」等、新たな眺望体験を促すと共に、個性ある代表景を見出す。

地域資源を活用した住民主体のまちづくり

- ・ 鉄橋や地域資源を中心としたまちづくりによる地域の活性化を図る。
- ・ 具体的には、特産物の生産と販売を行う施設やイベント広場等の整備を行い、住民主体による地域の魅力を高めるとりくみを促進する。

住民の熱意と工夫

- ・ 住民の方々が納得のできる形で施設をつくり、住民が守り、育てていく。
- ・ 効果を高める、あるいは継続させるためには、余部地域の熱意、工夫が必要。
- ・ 新しい世代の人の意見を取り入れ、理念を伝承する。

支える人々の拡大

- ・ 地域住民だけでなく、地域の活性化や余部鉄橋への愛着を持つ新たな人々の参加を募り、多様な人々が支えるしくみをつくる。



(3) 人や情報の交流拠点～余部鉄橋を拠点とした情報発信と交流の拡がり

地域の魅力を発信する交流拠点

- ・ 余部鉄橋の第二の人生や地域の魅力を情報発信し、交流拠点としての機能を果たす。
- ・ 具体的には、道の駅に代表される休憩施設と情報発信機能の整備を行い、但馬ロードシネマコンプレックス(魅力あふれる道づくり)との連携を図っていく。

但馬全体への交流の拡がりを見据えたオンリーワンの魅力向上

- ・ 「ここにしかないもの(オンリーワン)」の価値・魅力を掘り下げPRしていく。
- ・ 橋の上から余部地域を眺めることによる新しい交流を促進する。
- ・ 興味を持ってもらう(情報を求める人を増やす)ための取り組みを行う。
- ・ 点から線、線から面(但馬全体)への拡がりを念頭に置いて余部の価値を発信する。



【余部鉄橋周辺の近代土木遺産】

- 3 一体的な利活用による相乗効果

(1) 余部鉄橋と新橋梁を中心とした3本柱の一体的利活用

- ・ 余部鉄橋と新橋梁を中心に、利活用の3本柱が一体となったパッケージ化による利活用を目指す。

(2) 一体的利活用によって発揮される相乗効果

学びと心に残る余部鉄橋の継承

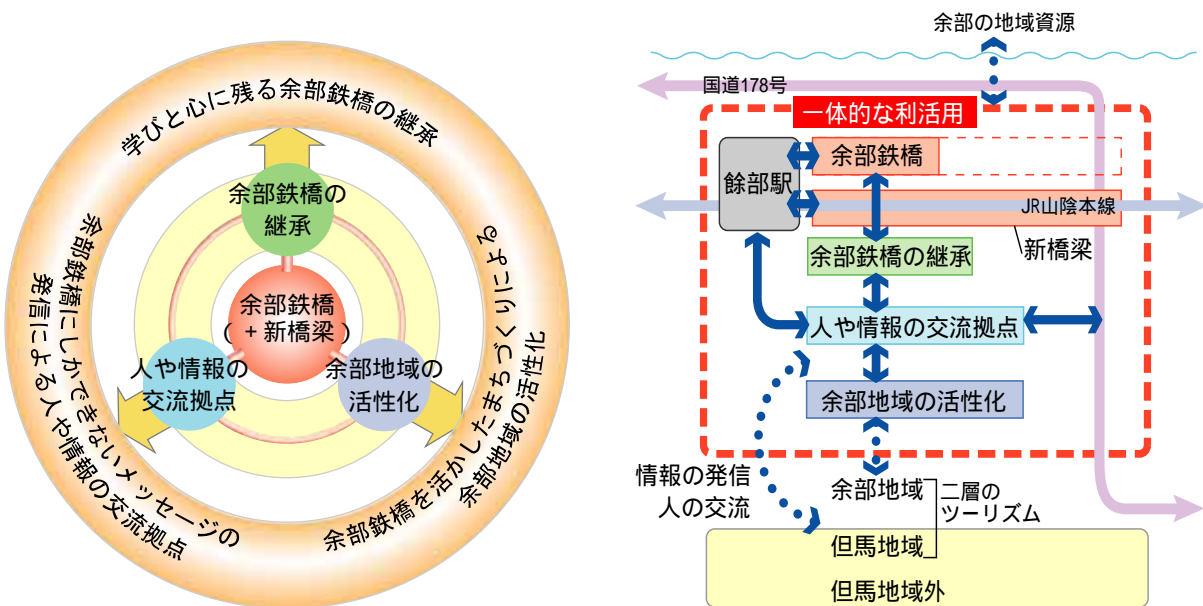
- ・ 「余部鉄橋の継承」は、後世へのメッセージ性の向上といった相乗効果を発揮する。

余部鉄橋を活かしたまちづくりによる余部地域の活性化

- ・ 「余部地域の活性化」は、新たな地域資源の創出、住民主体によるまちづくりの推進、来訪者の確保といった相乗効果を発揮する。

余部鉄橋にしかできないメッセージの発信による人や情報の交流拠点

- ・ 余部鉄橋にしかできないメッセージ(近代土木遺産の保存・利活用)の発信を行う。
- ・ 「人や情報の交流拠点」は、二層(但馬地域と余部地域)のツーリズムの展開や、幅広い人々との議論の継続といった相乗効果を発揮する。



【パッケージ化による利活用の概念】

- 4 議論の継続～時間をかけて再出発した余部鉄橋の価値をつくりあげる

- ・ 余部鉄橋を現位置で利活用するだけでなく、再出発した余部鉄橋の価値について時間をかけてつくりあげていく視点も重要である。
- ・ 鉄橋を一部残すことにより、そうした議論が継続的に行われていくことを促進する。

利活用方策の進め方

・本検討会では、余部鉄橋利活用の将来像を示すだけでなく、以下の3点に着眼し「議論の継続」を通じた「長期的な取り組み」についても検討を行った。

- 1) 「再出発した余部鉄橋」を通じた近代土木遺産の評価や価値観醸成の流れを明示
- 2) 利活用方策の具体化に向けた道筋の明示
- 3) 将来の運用の限界を見据えた判断の仕組みづくり

- 1 長期的な取り組み～将来の運用の限界を見据えた判断の仕組みづくり

(1)第 期：余部鉄橋の再出発に向けた準備期間（平成19年～平成23年）

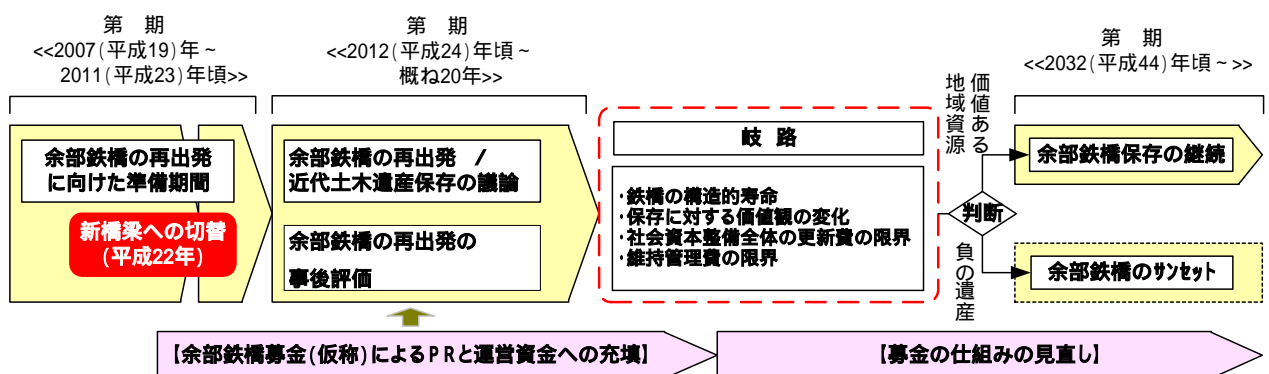
- ・具体的な整備計画の立案や運営の仕組みの検討、安全性の検証などを実施する。
- ・現位置より撤去する部材について、その利活用方策の検討を行う。
- ・アピールの主体の立ち上げを行うとともに、アピール方法の工夫を検討する。

(2)第 期：議論の継続による利活用の意義の醸成（平成24年～概ね20年間）

- ・余部鉄橋の再出発に対して、様々な議論が展開されるよう情報発信を行っていく。
- ・一般市民における近代土木遺産への関心が高まることが期待される。
- ・一方、こうした利活用の運用が限界を来す岐路が何らかの形で訪れた場合は、その後の適切な方向性を詰めておくことも重要である。

(3)第 期：余部鉄橋保存の継続／余部鉄橋のサンセット（平成44年頃～）

- ・余部鉄橋の利活用の継続が困難な場合でも、鉄橋の価値の継承やコミュニティの活性化については継続的に行っていくよう努める。



【今後の展開】

- 2 各主体の役割～直接的な関わりと間接的な関わりで利活用を積極的に支える

- ・余部鉄橋の利活用を支えるために必要な役割を明確にする。
- ・各役割について、直接的な関わりと間接的な関わりとを明確に示すことにより、各主体の積極的な関与を促す。

【参考1】余部鉄橋の概要と本検討会設置の背景

余部鉄橋の価値～貴重な土木遺産（国内随一の鋼トレスル橋梁）

- ・余部鉄橋は、JR 山陰本線 鎧よろい～餘部あまるべ間に位置し、明治45（1912）年に建設された、国内随一（長さ 310.70m、高さ 41.45m）の鋼トレスル式橋梁である。
- ・90 年余りの間、鉄道橋として山陰本線の運行を支えるとともに、貴重な観光資源として、また近代土木遺産として高い評価を受けている。



余部鉄橋と特急「はまかぜ」

余部鉄橋を取り巻く環境～建設当時の技術的制約から厳しい自然環境に立地

- ・建設当時の技術的制約から、海岸に近接（70m）した現在の位置に架橋される。
- ・冬季には日本海から強い季節風が吹き付ける厳しい自然環境に晒されている。
- ・鳥取砂丘と城崎温泉との中間地点に位置し、周辺には豊かな地域資源も点在する。



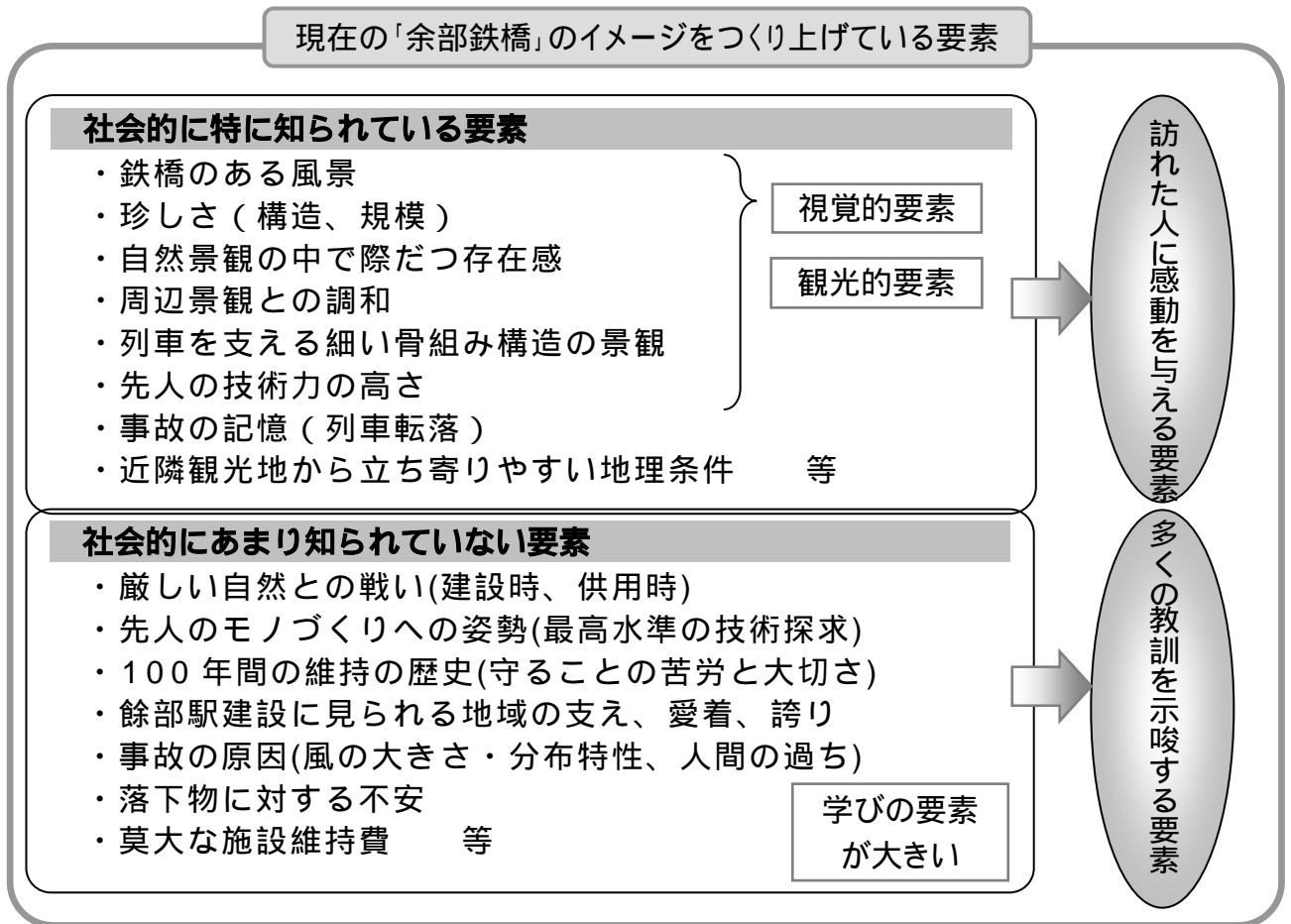
余部鉄橋をめぐる動き～安全性・定時性確保の検討と橋梁架替の決断

- ・昭和 61 年の列車転落事故を契機に風速規制が強化されたが、定時性の低下が深刻化するとともに、安全に対する不安は解消されないまま今日に至っている。
- ・現橋の存続を前提とした定時性確保に向け、余部鉄橋対策協議会等の検討機関を立ち上げ、平成 3 年～11 年まで検討が重ねられた。
- ・平成 13 年、JR 西日本の提案に基づき、余部鉄橋対策協議会にて定時性確保のための防風壁設置は困難であり、新橋梁への架け替えで取り組む方針を決議。
- ・新橋梁の形式選定のため「余部鉄橋定時性確保対策のための新橋梁検討会（H14～15）」が設置され、PCラーメン橋が適切であるとの結論を得た。併せて、現橋梁の今後の取り扱いについても、慎重な検討を行うことが求められた。（検討結果は「提言」として兵庫県知事へ提出）。

新橋梁への架け替えを契機とした利活用検討の必要性

- ・余部鉄橋の近代土木遺産としての価値や地域振興に資する観光資源としての価値を検証し、新橋梁が建設される中での利活用方策を検討するため、本検討会が設置された。

【参考2】余部鉄橋の利活用方策の基本方針（素案）



余部橋梁架替事業の実施

余部鉄橋の役割と景観の変化

定時性の確保のため、鉄道橋としての役割を終える。

- ・ さようなら！ありがとう！そして後世へ...
(香美町メモリアル事業コピー)
- ・ 新橋の築造により新しい景観が生まれる。
- ・ 従来の視覚的要素は劇的に変化

社会基盤を取り巻く世論の変化

成熟社会に向けて「社会基盤整備と管理のあり方」の議論が活発化

- ・ 初期投資費だけでなく、ライフサイクルコストの考え方の出現
- ・ 地域と共に支える視点が重要

余部鉄橋の利活用方策の基本方針（素案）

『余部鉄橋 100年間の雄姿と、

つくり守り育ててきた先人の技術・努力・苦労、

そして人々の思い出を伝える』

1. 在りし日の姿や景観を伝える。
2. 関わった人々の努力と苦労を伝える。
3. 訪れた人々、生活していた人々の思い出を伝える。

【参考3】余部鉄橋利活用検討会の検討経緯と構成員

検討経緯

- 第1回（H18.3.15）香住区中央公民館
...余部鉄橋の価値の確認と保存・利活用事例の収集
- 第2回（H18.7.26）余部地区公民館
...現地調査、残し方と利活用の基本方針(コンセプト)の検討
- 第3回（H18.9.28）豊岡市民プラザ
...利活用方策(案)の評価と絞り込み
- 第4回（H19.1.31）余部地区公民館
...望ましい利活用の検討を深める
- 第5回（H19.3.5）香住文化会館
...望ましい利活用方策の“提言”取りまとめ

検討会の構成員

学 識 者	川崎 雅史（京都大学大学院助教授）座長 岡田 昌彰（近畿大学理工学部講師）
地元自治体	藤原 久嗣（香美町長） 馬場 雅人（新温泉町長）
但馬地域代表	中貝 宗治（但馬自治会会長、豊岡市長）
地元住民等	山本美津男（余部連合自治会長） 関 清徳（香住観光協会会長）
鉄道事業者	河内 清（JR西日本建設工事部長）～H18.6 赤星 輝明（ ” ” ）H18.7～
兵 庫 県	原口 和夫（県土整備部長） 西村 良二（但馬県民局長）H18.3 南向 明博（ ” ” ）H18.4～
事 務 局	兵庫県県土整備部県土企画局交通政策課

【参考4】用語解説

アイデンティティ	... 地域の持つ特性や固有性を保持し続けること。
安定計算	... 構造物そのものや、構造物を構成する部材の安全性を検証すること。
イマジネーション	... 想像。想像力。過去の経験や現実体験したことを心の中で想像する土台、源、糧とすること。
近代土木遺産	... 幕末以降、西洋の近代土木技術が導入されてから第二次世界大戦以前までに造られた土木施設のうち、現存しているもの。
" Aランク	... 近代土木遺産を技術、意匠、系譜の評価基準に照らした上で、最も重要で、国指定重要文化財に相当のランク。
視座	... 物事を見る姿勢や立場。
シミュレーション	... 模擬的に実験を行うこと。実験内容を数式模型によって組み立て、これをコンピューター処理することによって実際の場合と同じ結果を得ようとするもの。 本検討会では、1/1,000の模型を使用した。
スケール	... 大きさの程度。規模。
代表景	... その土地の代表的な景観。例えば、絵はがきやパンフレット、ガイドブックの写真等に使われる景観。
但馬ロードシネマコンプレックス (魅力あふれる道づくり)	... 国体に向けた協働の取り組み「オンリー1ふるさとの顔づくり」を継続し、発展させたものであり、国の日本風景街道(シーニックバイウェイ)と同様の但馬地域の取り組み。
断面欠損率	... ある部材に占める、腐食部の面積の割合。 余部鉄橋の場合、主桁の断面欠損率が15%の結果が出ている。 (平成10年度調査)
ツーリズム	... レジャー(狭義の余暇活動)のみならず、自己研鑽、コミュニティ活動、ボランティア活動(広義の余暇活動)、ビジネス(労働)等の目的で、一時的に通常的生活拠点を離れ、旅行・滞在することを言う。 (ひょうごツーリズムビジョンから)
トレスル橋梁	... 余部鉄橋のように、細長い鋼製の部材を檜状に組み立てた骨組み形式の橋脚をもつ橋梁。鉄道橋を中心に、広い谷を渡す場合等に用いられたが、近年はあまり用いられない。 国内では、鉄道橋11橋、道路橋1橋が現存する。
日本風景街道 (シーニックバイウェイ)	... 自然、歴史、文化、風景などをテーマとして、「道行き」を通した「訪れる人」と「迎える地域」の豊かな交流を促し地域コミュニティの再生を目指した美しい街道空間を形成する取り組み。